（別紙２）

審査結果の要旨

氏名　　滝沢　正之

滝沢正之氏の博士号申請論文「カントにおける判断と推論－合理的実践としての認識－」は、カント『純粋理性批判』における超越論的認識理論を、判断と推論に基づく合理的な実践の理論として、経験論的に解釈し直すことを試みた興味深い論考である。全体は三部からなり、第 I 部「判断における合理性について」、第 II 部「推論における合理性について」、第 III 部「行為における合理性について」である。

第 I 部においては、「それは石である」といった基本的経験認識が、実体偶有性関係や因果関係という、諸々の事態を類型化して関連づける思考パターンのもとで、合理的な実践的判断として成立する、と論じられる。因果関係を代表例とする、カントの挙げる 12 の「純粋悟性概念」とは、総じて認識が成立する際に、われわれの与り知らぬところでつねにすでに関与し、その成立を可能にする「アプリオリな」思考形式であると、通常は了解されるが、本論文は、その関与を徹底して経験化しようとする。その論議によれば、超越論的原理としての時間の成立さえ、合理的な実践的判断の形成過程に依存するのである。

第 II 部においては、全体としての空間および時間認識が、条件づけられた個別から条件の全体性へと向かう実践的推論の観点から捉え返される。空間も時間も、一気に（直観的に）その全体が把握されるのではなく、そのいずれの認識も、私たち自身の経験的な＜いま、ここ＞を推論的に拡張する――もしくは全体論的背景として限定する――ことによって初めて成立しうる。このように全体という超越論的理性概念（理念）をめぐる認識論に関しても、本論文はあくまで経験論的な合理性の形成という観点から捉え返そうとする。

第 III 部においては、有名な第三アンチノミーにおける自由の問題を主題化し、自由を責任の帰属可能性と捉え、それを他行為可能性と関連づける。その際の本論文の特徴は、ゲーム理論（合理的行為論）を導入することによって、こうした自由が、個人の置かれた状況やその能力を問題とすることなく確証されうるとし、自由を世界のうちに無理なく位置づけてみせることである。

本論文は、こうしてカントの認識理論を徹頭徹尾、経験的な合理的実践論として捉え返すのであり、19 世紀から 20 世紀までのドイツ哲学や、英米分析哲学によるカント解釈を乗り越えようとする、現代のポスト分析哲学的観点を色濃く反映している。その点で、これまでに蓄積された観念論的、実在論的、科学論的、行為論的等々のカント研究に対して、本論文における解釈がもつ有効性と正当性はなお未知数である。しかし、経験論と合理論の新たな統一に向けて現代哲学の観点を貫き通し、伝統的な解釈に挑戦しうる論議を明快に展開してみせたことは、今後のカント研究に間違いなく一石を投ずるものである。

よって、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を十分に授与しうるものと判定する。